

万葉の川心

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

病に伏して無情を悲しび、修道を欲して作れる歌

(巻第二十 四四六八番歌)

うつせみは 数なき身なり

山川の清けき見つつ 道を尋ねな

「リハビリ出勤を始めます。」と友からメールが来た。長い病との闘いを経て、いよいよ職場に戻る日が来たのだ。

ずっとこの日を願っていた。復帰は、ゴールではなく始まりなのだから、喜んでばかりもいられないのだろうが、やっぱり仲間の元気な顔が再び見られるというそれだけで本当にうれしい。「とにかく、できるだけ休み休み、体を一番に考えて。」と返信する。そうは言っても、一歩入れば忙しさという渦にすぐに巻き込まれていくことは分かっているのだが。再び「少しは巻き込まれないと、リハビリにならないからちようどいいみたいです。」との返事だ。病に伏して弱った部分は確実にある。同時にそれを受け止めて、新しく進もうとするパワーのような強さが底に秘められて、なんだか新しい。近いうちに一緒に飲もうと決めた。

自然再生、環境の再生、「再生」というと、死にかけたものや失ったものが、前の通りに生まれ返る、または、生まれ返らせるというイメージがあった。録音したものを再生するかのごとくである。だが、「再生したもの」には「以前のもの」以上の何かがあるに宿る気がしてくる。返らないはずの覆水を盆に返すのだからそれだけでも大変なことだし、壊れかけたことの原因究明、再生への地道な努力、時間がかかっても諦めないしつこいまでの粘り

強さが必要だ。さらに、戻して終わりではなく、それを維持するには新しい何か、人々の強い願いやつながりが必要になるだろう。全くなるところから誕生させること、もしくはそれ以上の知恵と労力があるかもしれないと思う。

「生きの命とは、はかないものだ。山川の清けきを見ながら、仏道を求めたいよ。」これは、大伴家持が政争の醜い時代の中にいて、病に伏したとき、仏道の修行を欲して詠んだ二首のうちの第一首目である。絶望の淵にあつても、なお強く「揺るがない何か」「永遠の道」「千歳の命」を求めたい。山川の清けさがそばにあれば、自ずと道が見えてくる。山や川の大きさと清らかな美しさが、はかなく小さな自分の力強い励みとなる。人は山と川とともにいてこそ、人の想いという底知れないものが見え、自分の中にある揺るがないものが確認できるのかもしれない。写真の歌碑は、がん封じの寺として有名な奈良市の大安寺境内にある。

彼女は倒れる前の場所に戻り、再生がスタートした。ある若者からの年賀状には、「二兎追わなければ、二兎は得られず」とあった。思わず笑ったが、それも何だか頼もしい。誰もが明日は知れないはかない命。揺るがないものを持ち、山に川に励まされながら、人の間で生ききりたい。

